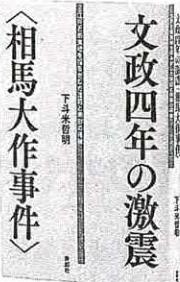


1/15(日)の北海道新聞で紹介  
されました! 切り抜いてぜひ  
ポップとしてお使い下さい

北海道新聞

2023年(令和5年)1月15日(日曜日)

## ほっかいどう



寿郎社 2530円

相馬大作事件は江戸時代後期の1821年(文政4年)、主君の無念を晴らそうと南部藩の元藩士が、津軽藩主を暗殺しようとした事件。首謀者の相馬大作は幕府によって処刑されるが、江戸の庶民の受け止め方は違った。主君のあだを討とうとする義挙として拍手喝采、事件は講談や芝居、読み物などで好評を博し、人気は幕末から明治、大正、昭和と続いた。

本書はこうした世間に流布する相馬大作(本名・下斗米秀之進)の人物像や、事件の受け止め方に異論を唱えるノンフィクション作品だ。著者は札幌在住の歴史研究者。同じく相馬大作の名は、30年以上に及ぶ調査を元に本書をまとめたという。

## 調査30年 義挙の本当の狙いとは

また、本書が事件に迫る鍵と考へているものに蝦夷地の存在がある。当時はロシアの南下政策に備え幕府が蝦夷地を直轄とした第1次幕領期(1799~1821年)。もともと確執のあった津軽藩と南部藩だったが、幕府が命じた蝦夷地警備を巡り両藩には新たな軋轢も生まれる。主君の遺恨を晴らすという動機は表向きで、北辺の守りに対する警告こそが大作の狙いだったと著者は指摘するのであ

文政四年の激震△相馬大作事件△

下斗米哲明著

者は述べる。確かに主君に対する忠誠など、戦後民主主義の時代にはそぐわない。ただし調べてみると、21世紀に入つてもこの事件を扱った時代小説の出版は途切れなく続いている。例えば、宇江佐真理「三日月が円くなるまで」(2006年)、梶よう子「みちのく忠臣蔵」(09年)、秋山香乃「吉田松陰 大和燐々」(14年)などの作品だ。やはり彼には今なお多くの書き手をひきつける、不思議な魅力が備わっているということなのだろう。著者が事件に関心を持ち続けた背景にはそうした理由も考えられる。

\*本書は地方小扱いですので一部の書店を除き新刊配本はありません。必ず事前のご予約(ご注文)をお願いします。

ご注文は下記にご記入の上→寿郎社 FAX011-708-8566

注文票

●書店名	●発行 寿郎社	●発注日 月 日	●備考
●御担当者名	●著者名 下斗米哲明		
	●書名 文政四年の激震(相馬大作事件) 江戸と蝦夷地を揺るがした津軽と南部の確執		
●注文数 冊	●定価: 本体 2300 円 + 税	●ISBN 978-4-909281-46-3 C0021	